読書会しんぶん

what's 2konen?･･･京都市芸在学中の夏からはじまった読書会、10年目に新聞になりました、まじめにふざけて10年、ねじれすぎて10年たったら棒になっていた最強ねじれドーナツ、作家ズの自由研究isつづく！

二光年

もだもだモダニズム号

Vol.01

じゃがいものモダニズム

對木裕里

1. 重力のはじまり

この地球にはある力が存在している、重力である。ニュートンが万有引力を発表したのは1687年、それから今まで300年ほど、私たちは重力の中を生きている。では、それ以前の重力という「言葉」を認識していなかった時代の世界の住人たちは、木の葉が落ちることを、布が垂れることを、長い棒がしなることを、一体どういうことだと思っていたのだろう？それぞれ命に終わりが来て、そのかたちを変えるとか？すべてのものは本来の位置である地面へ戻るとか？それとも、あらゆる現象は神の決めた運命だとか？そんなことを考えたかもしれない。しかし現在、この地球の真ん中から、ものを引っ張る力「引力」と、地球が自転することによって生じる「遠心力」を合わせた力が「重力」であることは自明だ。物理科学の分野における大発見や発想の転換は、時間をかけて人々へ浸透し、ゆっくりと人間の認識に影響を与える。民俗博物館などで見る古い時代の人形や仮面は見たものを素朴にそのまま写しているように見える。そう見えたこと、がすべてであり真実であった。そこにはまぎれもなく魅力がある。しかし今現在、それを私にできるかというとそれは難しいことだ。その時代、その世界の捉え方がある。知識や情報が、私たちの世界をどんどん観念的にしてゆく。美術作品とは、その時代ごとの人間の認識のありさまをイメージにおいて表象している。「もの」のかたちとは、そのもの固有のものではなく人間の認識の上に成立する。したがって重力という認識を得た人間のイメージと、それ以前とでは歴然たる差が生まれる。水はこぼれる、布は垂れる、リンゴは落ちる、それらはすべて地球丸ごとで起きている重力による現象である。

2. 世界の向き

先日、横浜美術館でブランクーシの「空間の鳥」を見た。鳥が垂直方向に立っている。ブランクーシには、ころりと転がった卵型の頭部の作品「眠れるミューズ」もある。こちらは本来身体の一部であるはずの頭がボディから取りはずされ、ただそのまま、という感じで置いてある。鳥も頭部もくるりと90度回転して置かれることによって、私たちの中に固定されたイメージを貫通し、物体として現れる。私たちの普段見ているイメージとは、実はある固定されたフレームから見た像であり、その枠が回転しただけで天地の観念は揺らぐ。一方で「無限柱」について、これは「柱」に見える。イメージ通りの向きである。しかし、柱が何かを支えるために建てられるものであるのなら、この柱の支えている対象はなんだろうか？地面から空へと高くそびえ、その上空に何かあるのか？いや、もしかしたらこの柱の支えているものは地面そのもの、つまりこの地球を支える柱なのかもしれない。それは世界の向きを180度回転させる方法である。この世界にものが立てば立つほど、世界はある向きに固定されてゆく。ブランクーシは地球の表面に、「ものを置く」ことによってこの世界の向きを捉えなおそうとしたのではないだろうか。彫刻とは一般的に、まずそのフォルムから意識される。しかし彫刻を読み解く上で、かたちと同等かそれ以上に、それが置かれた向きについて考えたい。そうすると彫刻という言葉に対して視界が開けてくるように感じる。

3. ものの適切な置き方

さて、地球の上に乗った者たちは、抗えぬその力のはざまで、ちょうどいい姿勢を探り続ける。私自身の問題としては、それがいかなるかたちであるか、ということよりもそれがどの向きで置いてあるのか、といったことに興味があった。「もの」をどのように置こうか、そんなことを日々考えていたように思う。しかし、考えれば考えるほど、世界の矢印が固定されてゆくような行き詰まりを感じていた。そうしたある日、キッチンで手に取ったじゃがいもに目が留まった。･･･じゃがいもは地中で育つため、上下左右を持たぬまま大きくなる。そのかたちはまるで無重力空間に浮かぶかたまりのようだ。天地のないものに置き方は設定できない。かたちとして「じゃがいも」に出会い直したとき、目からうろこが落ちたような気持ちだった。

4. じゃがいもでモダニズム

ものを地面の上にどうやって置こうか四角いフレームに固定されてしまったのだろう。じゃがいもに出会ったことで、ころころ転がる発想を得た。無重力形態としてのじゃがいもが私の手の中にあるということはどういうことだ。じゃがいもに上下左右がないとしたら、それを持っている私自身の上下左右もなく、私の立っている地面にも上下左右はなくなる。天と地はひっくり返り続け、様々なものを巻き込みながら大きな運動となって、全体はひとつの大きなユニットとなる。上下左右でものを見るような認識はたかだか300年程度の常識である。じゃがいものようにすっとぼけた顔でただそこに在ることもできる。すべての問いに答える必要などない。たったひとつの真実であるとして、その枠組みを取り外し自分の世界を構築できないことがあるとだろうか。きっかけはきっと身近にある。これが私にとっての「脱重力」、モダニズムである。

空間の鳥
photo by WADA Mayuko

古い絵の話

上坂秀明

日本画は第二次大戦を経て、教育の中で、個人性を強調されたため、世界の潮流の中に自ら飛び込んでいった。今はと言えば、江戸時代をザックリ日本趣味とくくり、模倣していくことで、幽霊のようにつかみどころのない日本の原像を探しているように思う。日本にいながら日本というイメージを求め模倣し、人に説明するような表現も多い。さらにブームに乗って地方の祭りや風習に目を向け、描写し説明したものも多い。

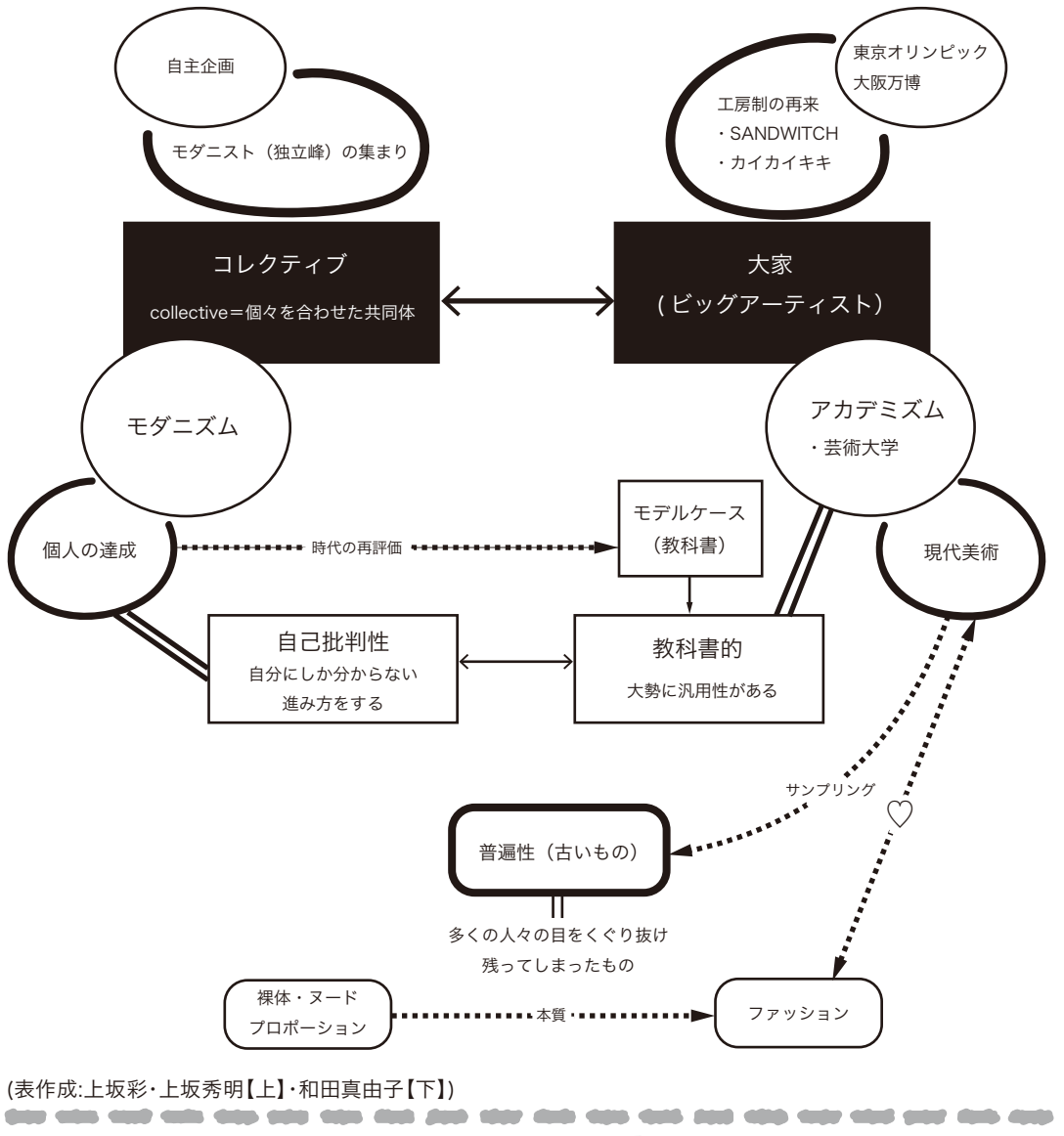
大正時代に一つの形になった日本画の写生に立ち戻り、デッサンを通して、もう一度表現の可能性を引き出してみたい。ただ目の前の物事を平面媒体に写すことによって生まれた置換を、もう一度自分の目に写して再評価することこそが、僕の中における自己評価でありモダニズムなのだ。

生者のモダニズム

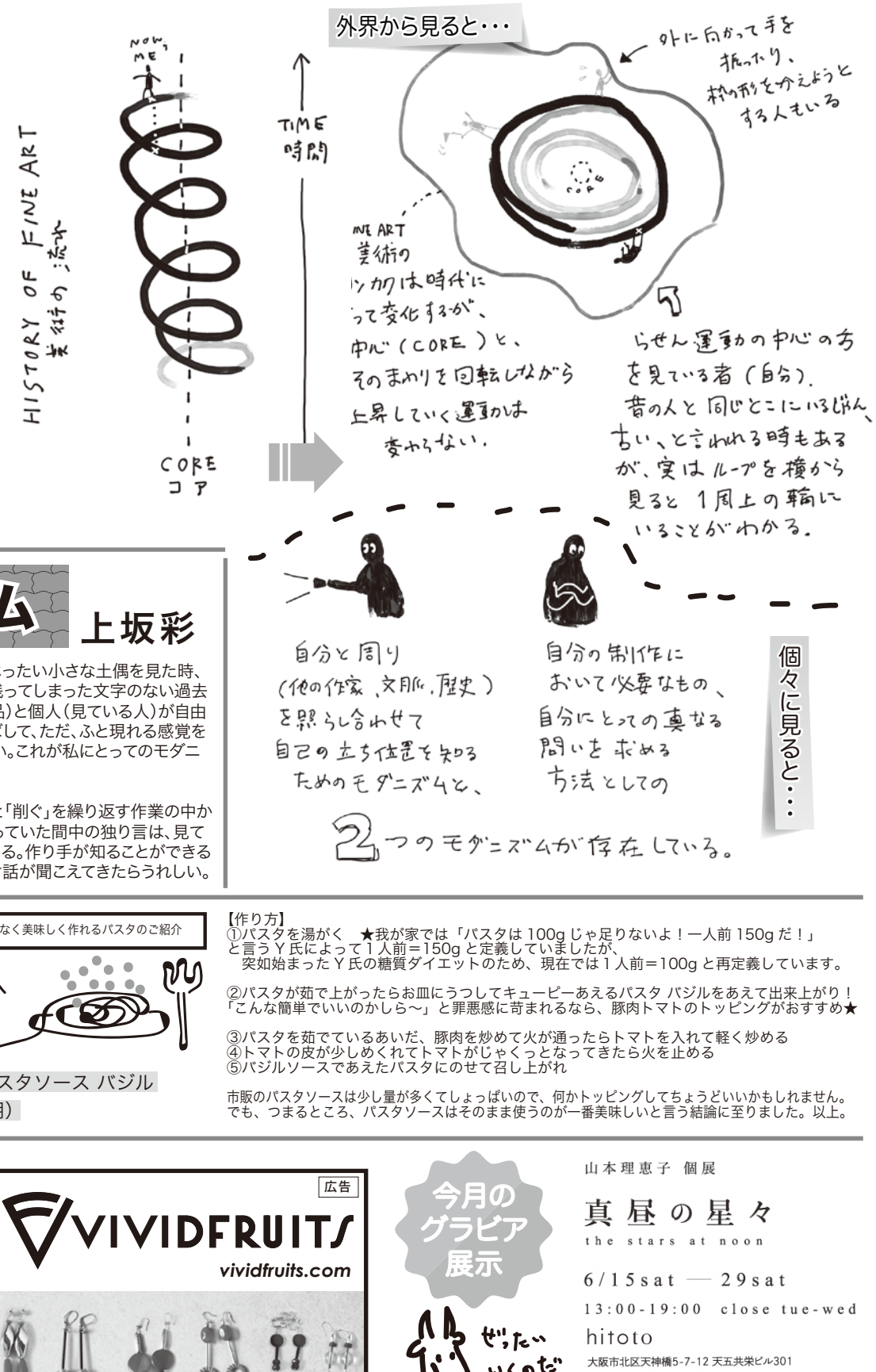
上坂彩

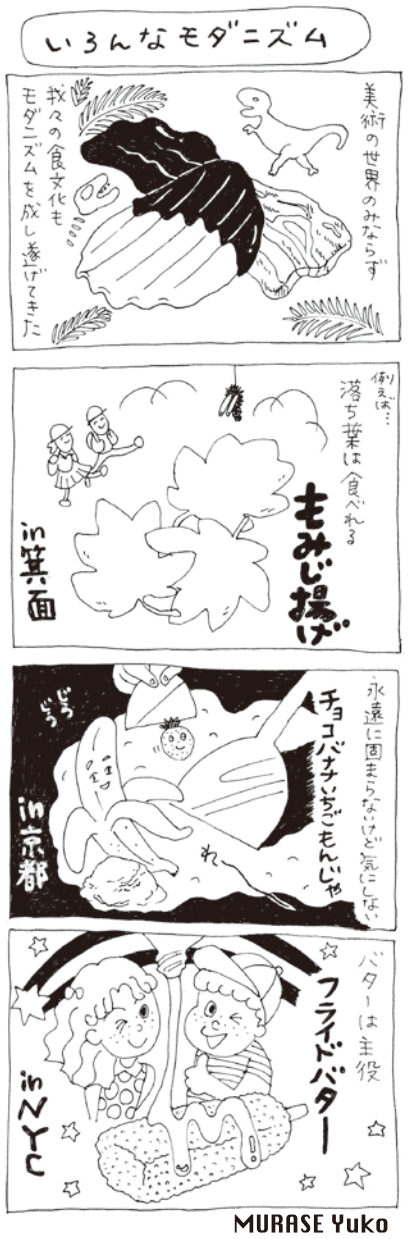
杉本博司の『歴史の歴史』という展覧会で、縄文時代の平べったい小さな土偶を見た時、自分が死んだ後の気持ちを形でつくったのかな～と感じた。残ってしまった文字のない過去のものたちには、いろんな学説や定義がつくけれど、個人（作品）と個人（見ている人）が自由に対話してもいいんだ！と気づいて、私もコンセプトをすっ飛ばして、ただ、ふと現れる感覚を無心で形にしたいと思った。その過程の中で何かわかればいい。これが私にとってのモダニズムの始まりであった。

自分の中の「よい」「よくない」の感覚に基づいて、「肉付け」と「削ぐ」を繰り返す作業の中から出てくる抽象的な形は、人によって見え方が違う。そして作っていた間中の独り言は、見てもらうことで対話になって、知らなかったことを知ることができる。作り手が知ることができるのは、いま生きているからの特権！であり、そこら中で色んな対話が聞こえてきたらうれしい。



(表作成:上坂彩・上坂秀明【上】・和田真由子【下】)





凝ったお料理は全くしません、そんな貴方のために厚地朋子がお送りする間違いなく美味しく作れるパスタのご紹介

パスタはこねくりまわすな

【材料】

お好みのパスタ人数分・キューピーあえるパスタソース バジル
豚肉（トッピング用）・トマト（トッピング用）

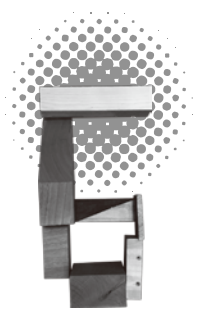
【作り方】

①パスタを湯がく　★我が家では「パスタは100gじゃ足りないよ！一人前150gだ！」と言うY氏によって1人前＝150gと定義していましたが、突如始まったY氏の糖質ダイエットのため、現在では1人前＝100gと再定義しています。

②パスタが茹で上がったらお皿にうつしてキューピーあえるパスタ バジルをあえて出来上がり！「こんな簡単でいいのかしら～」と罪悪感に苛まれるなら、豚肉トマトのトッピングがおすすめ★

③パスタを茹でているあいだ、豚肉を炒めて火が通ったらトマトを入れて軽く炒める
④トマトの皮が少しめくれてトマトがじゃくっとなってきたら火を止める
⑤バジルソースであえたパスタにのせて召し上がれ

市販のパスタソースは少し量が多くてしょっぱいので、何かトッピングしてちょうどいいかもしれません。でも、つまるところ、パスタソースはそのまま使うのが一番美味しいと言う結論に至りました。以上。

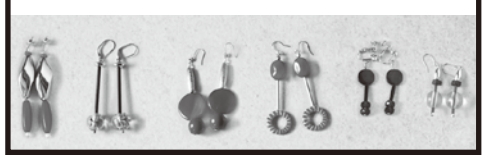


美術うらない

6月生まれのあなたにはイヴ・クラインがオススメ！たまには顔料を使って制作してみましょう。服を脱ぐのにも適した気候になってきました、ラッキーアイテムは折り鶴、おいしいソースは青の洞窟、顔料はしつこいですので寝る前はお風呂に入るのを忘れずに★

広告

VIVIDFRUITS
vividfruits.com



今月のグラビア展示

ぜったいいくのだ

山本理恵子 個展

真昼の星々
the stars at noon

6/15sat — 29sat
13:00-19:00 close tue-wed
hitoto
大阪市北区天神橋5-7-12 天五共栄ビル301
E-MAIL info@hitoto.info
www.hitoto.info

對木裕里 TSUIKI Yuri
1987～ 彫刻 東京都在住
最近の個展『玉と敷物』switch point(東京)

和田真由子 WADA Mayuko
1985～ 絵画 大阪府在住
最近の個展『建物2』児玉画廊(東京)

上坂秀明 KOSAKA Hideaki
1988～ 日本画 滋賀県在住
最近の個展『SWITCH』Art-Space-MEISE(京都)

上坂彩 KOSAKA Aya
1984～ 彫刻・陶芸 滋賀県在住
最近の展示『表面の中身』Nanao pottery(滋賀)

山本理恵子 YAMAMOTO Rieko
1985～ 絵画 大阪府在住
最近の個展『空白の頁』MORI YU GALLERY(京都)

村瀬裕子 MURASE Yuko
1985～ 絵画 大阪府在住
最近の個展『思い出し絵画』西宮市民ギャラリー(兵庫)

厚地朋子 ATSUCHI Tomoko
1984～ 絵画 京都府在住
最近の展示『継ぎ接ぎ展』JIZUKAYAMA GALLERY(大阪)

読書会しんぶん「二光年」1号★発行日: 2019年6月15日★企画・編集・発行: 読書会しんぶん部「二光年」発行係★今号の編集長: 對木裕里/和田真由子★執筆者: 厚地朋子、上坂秀明、上坂彩、對木裕里、村瀬裕子、山本理恵子、和田真由子(協力: 関口正浩)★グラビア: 山本理恵子★掲載記事・画像の無断複写、複製、転写を禁じます。★Copyright © 読書会しんぶん「二光年」

お問い合わせ: 2konen.newspaper@gmail.com

穴あきドーナツをめざします。。！

へんしふ局だより: 自分の考えの土台はどこから来たのか？と学生のとき疑問に思ったのがモダニズムについて考えるきっかけでした。日本で美術(fine art)に携わるとき避けて通れないこのドロドロを、カラッと揚げて来濠にしていきましょう。ねじりドーナツはねじれ続けても切れません、超つよい棒になるのです。そういえばねじりドーナツに似たかたちの菓餅(さくべい)ってありますよね、次号は日本文化が中国文化から受けてきた影響についての特集予定です。